

夫が治療はせずに在宅で療養するが、家族として心配なことばかりである

7

膵臓がん末期の夫は、治療をせずに自宅での生活を希望している。食事ほとんど摂らず、うつ傾向にもあるようだ。この先、家族だけでささえていけるのか不安だという。

1 相談内容 80代女性 膵臓がんの夫の相談

相談者の夫は80代。二世帯住宅に住む長女と20代の孫との3人で来られた。

元気だった夫が急に体調不良を訴え、膵臓に異常があるようだといわれて、この病院を紹介された。膵頭に腫瘍があり、肝臓にも転移が見られると診断され、手術はできないので抗がん剤治療が必要といわれた。抗がん剤を数日服用したが副作用が強く、夫は「もう続けたくない。あとは家で過ごしたい」と言い、主治医も納得してくれた。

今は週に1度、外来を受診しているが、手足と腹部が腫れてきてCT検査を受け、来週、結果を聞きに来ることになっている。

夫は家では寝ていることが多いが、トイレには自分で行っている。ほとんど何も食べなくなってしまう、うつ傾向を心配している。いろいろと薬を処方してもらっているが、食べないのに薬ばかり飲んでいいものかと思っている。栄養補助のサプリメントを飲んでもらっているが、主治医にはかまわないといわれた。このあと、どういうふうになっていくのか、自分たちだけで世話をしていくことが不安である。

2 相談内容のポイント

- 1 膵臓がん末期の夫は、治療をせずに在宅療養をしたいという希望を持っている
- 2 夫の意思をささえたいが、心配なことばかりである
- 3 自分たちだけで世話ができるのか不安である

3 ピアサポーターの対応のポイント

- お元気だったご主人が、突然こんなことになってしまってどうしたらよいのかという不安な気持ちを傾聴した。
- 膵臓がんは発見が難しく難治であることを、今年参加した講演会などで聞いたこととお話した。
- 介護保険について聞いてみると、まだ申請していない。介護ベッドも手すりもないとお聞きしたので、すぐに申請されるようにお勧めした。自分でトイレに行きたい気持ちはあってもつらい状況であるし、まず環境を整えるのが第一とお話した。在宅医や訪問看護については相談支援室につないだ。
- 食事については栄養補助食品がいろいろあるので、取り入れながら、季節のもの、食べやすいものを少しずつでも一緒に食べられるようお勧めした。
- うつ傾向の患者さんにどう接したらよいか聞かれたので、自分の経験として、家族が自分を大切に思っていることを伝え続けてくれたので、頑張ろうという気持ちになれたことなどを話した。
- 自分のことをこんなに思ってくれる孫がいるだけでも患者さんの大きな力になると思うし、相談者のいうことも聞いてくれやすいのではとお話した。

4

ピアサポートの結果

相談者は、さっそく介護保険の申請をするといわれた。在宅医や訪問看護についても相談支援室にお連れして対応してもらった。

夫には、趣味のことなどについて家族みんなでいろいろと話をし、少しでも気持ちを立て直してもらおうということになった。

5

対応したピアサポーターの所感

高齢とはいえ、それまで元気だった夫ががんと診断され、短期間のうちに「治療はせずに在宅で過ごす」という状況になった。家族にとって、現状への理解が十分にできず、不安が募るのは当然のことである。がん末期の場合、介護保険の申請は後手に回りがちである。円滑に相談支援センターにつなぐことができ安堵した。

今後、こういうケースは増えていくと思われる。もう少し具体的にお話できるよう、知識を身につけて、適切な窓口につないでいきたい。

考察

この事例から学ぶこと

社会資源の活用に向けて適切な窓口につなぐことはピアサポーターの役割であり、それが患者家族の精神的支援にもなる。

【事例の背景と課題】

- 在宅療養を希望する患者に対して、切れめなく支援することが言われているが、まだ十分に退院支援が提供できているとは言えない。ピアサポーターは医療機関および在宅サービスとの連携の一端を担っていると思う。

【ピアサポーターに必要な知識や情報】

- ピアサポーターが知っておくべきこととして、通院が困難になった患者に対し、24 時間体制の在宅療養支援診療所（訪問看護ステーションとの連携）のことなどを理解しておくことも必要だ。

【講評】

- 在宅療養における家族の不安な気持ちを傾聴している。また、介護保険の申請について、すぐに相談支援室へお連れしたことは良かった。食事のこと、夫にどう接したら良いか等、体験談を具体的に話して分かりやすかったと思う。但し、食事が食べられないことや栄養補助食品について、主治医に相談するよう勧める事も大切だ。
- このケースでは、病院内でのサポートであるために相談支援室にすぐつなぐことができた。しかし、そうできないがんサロンなどでの相談の場合もある。その時には相談の窓口や在宅支援の制度について、相談者に説明できることが求められる。
- 在宅療養を希望された患者に対して、家族が患者の趣味のことなどを話題にできたことは、今後の在宅療養を支えるのに有意義だと感じた。